

高等学 校

平成 31 年度 (2019 年度)

教育研究員研究報告書

家 庭

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究仮説	3
IV	研究方法	3
V	研究内容	6
VI	研究の成果	15
VI	今後の課題	16

研究主題	消費者としての視点から生活の課題を見だし、改善することのできる資質・能力を育むための授業改善と学習評価の充実
------	--

I 研究主題設定の理由

1 成年年齢の引き下げ

平成 30 年 6 月の民法の改正により、令和 4 年 4 月 1 日から成年年齢が 18 歳に引き下げられ、18 歳から一人で有効な契約をすることができるようになる。一方、保護者の同意を得ずに締結した契約を取り消すことができる年齢が 18 歳未満までとなる。このことを踏まえ、自主的かつ合理的に社会の一員として行動する自立した消費者の育成のため、また、若年者の消費者被害防止・救済のためにも、これまで以上に消費者教育の指導の充実が求められる。

2 消費者の視点

平成 24 年 12 月に「消費者教育推進に関する法律」が施行され、平成 25 年 6 月に「消費者教育の推進に関する基本的な方針」が閣議決定されたことを受け、文部科学省では、学校教育や社会教育における消費者教育の充実に向けた施策に取り組んでおり、平成 28 年 3 月に発行した『消費者教育のヒント&事例集』の中で、消費者教育を行う上で日頃の授業や活動に「消費者」の視点を加え、実生活の場面で捉えなおしてみることや、関係者が相互に連携して取り組む効果等について示し、「消費者」の視点をもった授業例について紹介している。

3 高等学校学習指導要領

平成 30 年 7 月に示された「高等学校学習指導要領解説家庭編」には、「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を通して、様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を育成することを目指す。」と記されている。家庭科における見方・考え方については、「生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造するために、家庭科が学習対象としている家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・安全・快適・安全、生活文化の伝承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫すること」と示され、各教科等の目標や内容を「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の三つの柱で再整理している。

4 学習評価

学習評価については、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（文部科学省 平成 28 年 12 月 21 日）において、「子供たちが自己評価を行うことを、教科等の特質に応じて学習活動の一つとして位置付けることが適当であること、こうした評価を行う中で、教員には、子供たちが行っている学習にどのような価値があるのかを認め、子供自身にもその意味に気付かせていくことが求められる。」と示されている。評価の観点のうち「主体的に学習に取り組む態度」については、子供たちが学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしていたりしているか、意思的な側面を捉えて評価することが求められる。

5 研究主題の設定理由

今年度の教育研究員の全体テーマは、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善である。また、高校部会の研究テーマは「学校の教育活動全体を通して育成すべき『資質・能力』を育むための授業改善と学習評価の充実」である。

成年年齢の引き下げに伴い、生徒に自立した消費者として適切な意思決定する力の一層の育成が求められているが、都立高校における生徒の現状としては、自らの消費行動や生活の課題を身近なものとして捉えられていないため、家庭や社会の課題を見だし、改善に向けて実践する力が十分に身に付いていない。また、自らの生活を振り返る経験が乏しいため、学びの過程等を客観的に捉える機会が少なく、自己の行動を調整して、主体的に生活を改善しようとする実践的な態度が身に付いていないことなどがあげられる。これらの現状を踏まえ、次の三つの点を本部会の課題として設定した。

- (1) 生活の課題を身近なものとして捉えるための視点を学習に継続的に取り入れる必要がある。
- (2) 自分や家庭、地域の生活の課題を見だし、改善しようとする態度を身に付けさせるため、実践的・体験的活動や協働学習を継続的に取り入れる必要がある。
- (3) 自らの生活を振り返り、行動を調整する態度を養うため、自己評価や相互評価を工夫する必要がある。

以上の課題に加え、高等学校学習指導要領では、消費者教育の充実が求められており、適切な意思決定に基づいた消費行動ができるように示されていることから、本部会では、自立した消費者としての「資質・能力」を育成することが必要であると考えた。

Ⅱ 研究の視点

1 消費者としての視点から生活の課題を見いだす

家庭科の内容は、日常の生活や社会に出て役立ち、将来生きていく上で重要であり、生徒の学習への関心や有用感が高いなどの特性が見られる。一方、生徒には、家族の一員として協力することへの関心が低いこと、家庭での実践や社会に参画することが十分ではないことなどに課題が見られる。そこで、消費者としての視点を通して、生活の中から課題を見いだして課題を設定し、解決する力や、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造しようとする態度などを育成することを基本的な考え方とし、知識・技術の習得のみではなく、意思決定や問題解決を含めた資質・能力の育成を目指すこととした。

2 生活の課題を改善することのできる資質・能力を育むための授業改善と学習評価の充実

高等学校家庭科の目標は、「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を通して、様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力」を育成することである。学習過程を通して、生徒が自分や家庭、地域の生活を主体的に創造しようとする事、達成感や有用感を涵養し、学習に主体的に取り組むことができるようにした。学習過程において、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見直し振り返る場面や、グループなどで対話する場面、生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、工

夫を図った。

また、自らの考えを記述したり話し合ったり、他者との協働を通じて自らの考えを相対比する場面を設けたり、意見交換等をしたりするなど、多面的・多角的に比較検討することにより意思決定ができるようにする。さらに、粘り強い取組を行おうとする側面と自らの学習を調整しようとする側面を授業改善を図る中で、適切に評価できるようにしていくことで、自立した消費者を育成することができると考えた。

Ⅲ 研究仮説

令和4年4月1日から成年年齢が18歳に引き下げられ、自立した消費者として、適切な意思決定に基づいて行動できることが求められている。しかし、若年成人の知識・経験・消費生活における能力は不十分だとされ¹、消費者教育の更なる充実が求められる。限られた家庭科の授業の中で生徒たちに消費者としての意識をもたせるためには、消費行動は、家族・保育・福祉や衣食住の全てに関するものであることを意識して題材を工夫する必要がある。

学習評価は、学校における教育活動に関し、生徒の学習状況を評価するものである。「生徒にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためにも、学習評価の在り方は重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取組を進めることが求められる。教師が自らの指導のねらいに応じて授業の中での生徒の学びを振り返り学習や指導の改善に生かしていくPDC Aサイクルが大切である。また、「主体的に学習に取り組む態度」の評価に当たっては、「主体的・対話的で深い学び」の視点から、授業改善を図り、適切に評価できるようにしていくことが重要である。例えば、生徒が自らの理解の状況を振り返ることができるような発問の工夫、自らの考えを記述したり話し合ったりする場面や他者との協働を通じて、自らの考えを相対化する場面を単元や題材などの内容のまとまりの中で設けたりすることが大切である。前述したような活動を通して、生徒に継続的に自己評価及び相互評価させることにより「自らの学習を調整しようとする態度」や「粘り強く学習に取り組む態度」が身に付き、生涯を通して生活を改善する力を身に付けることができる。これらを踏まえ、本研究では以下のように仮説を設定した。

- 消費者の視点を継続的に学習に取り入れることによって、日常生活における課題を身近なものとして捉えられるようになり、主体的に課題を見だし、改善を目指そうとする態度を身に付けることができる。
- 生徒の自己評価及び相互評価を工夫することによって、自己を調整する態度や生涯を通して生活を改善する力を身に付けることができる。

Ⅳ 研究方法

研究を進めるに当たり、複数の単元で活用できる学習活動を設定し、部員が共通して取り組むことで授業改善を図り、仮説を検証できるようにした。

¹消費者庁「若年者の消費者トラブルの現状と対策について」（平成29年8月21日）

1 具体的方策

- (1) 本研究では、消費者の視点を領域横断的（単元間連携）に学習に用いて、実習や観察、調査、実験、演習等を取り入れた、いわゆるアクティブラーニングの授業を行い、身近な生活の課題について主体的に考えることができるようにした。さらに、課題の改善を目指そうとする実践的な態度を養うために、消費者の視点を取り入れたグループワークや知識構成型ジグソー法を用いて、消費者としての自覚をもたせ、学びを深めるよう工夫した。また、単元のまとめとして、自らの考えを記述・発表し、グループで共有した結果について、振り返りや課題の改善計画を行った。また、食習慣や生活習慣、消費者としての意識等に関する事後アンケートを行うことによって、自身の生活の改善に向けた実践ができたかを評価し、実生活の改善につなげることができると考えた。実生活の改善の例として、文化祭や地域のフェア等で学習成果を発表する取組を通して社会へ参加する意識をもたせるとともに、生徒に家庭や地域の中の消費者である自覚をもたせ、生活を主体的に創造しようとする実践的な態度を養うことができると考える。
- (2) 単元や授業の導入で、ルーブリック評価表を用いて生徒に評価規準を伝えることで、学習へ取り組む意欲の向上を図るとともに、生徒に評価表に基づく自己評価の機会を与え、学習の定着状況を自分自身で確認し、学習に取り組む姿勢を振り返ることができるようにした。さらに、生徒同士で相互評価を行うことを通して、自己肯定感を高め、自己の行動を調整できる能力を養えるようにした。

2 検証方法

単元の導入で、生徒が自らの生活を振り返ることができるアンケートを実施し、単元のまとめとして実施する事後アンケートと比較することにより、生活上の課題を見だし、改善を図ることができたかなど、生徒の変容を見取ることとした。さらに、生徒が自己評価及び相互評価を行い、自身と他者の良い点や可能性に気付き、主体的・能動的に学ぶ意欲を高められたかを検証、分析することとした。以下に、本研究のルーブリック評価表を示す。

【学習評価表】

《評価規準：4 大変良い 3 良い 2 もう少し 1 改善が必要》

	4	3	2	1
知識・技能	〇〇に興味をもち、問題点をよく調べ、今後の対策について具体的に考えることができた。	〇〇に興味をもち、問題点をよく調べたが、今後の対策については具体的な意見を十分だせなかった。	〇〇に興味をもち、問題点をよく調べたが、今後の対策について考えられなかった。	〇〇の興味が欠け、問題点を調べる姿勢が不十分であった。
思考力・判断力・表現力	明瞭な声で、相手に伝える意思をはっきりともち、発表できた。	明瞭な声だが相手に伝える意思は弱かった。	声が小さく、相手に伝わりにくい発表であった。	自信がなく、相手に伝える意思がもてなかった。

合計点 / 8点

〈次回への課題〉

(切り取り)

一緒にグループだった友達を評価しよう

() さん

《4 大変良い 3 良い 2 もう少し 1 改善が必要》

知識及び技能	4	3	2	1
思考力・判断力・表現力等	4	3	2	1

合計点 / 8点

〈良かった点 / 改善した方がよい点〉

研究構想図

全体テーマ 「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」

高校部会テーマ

「学校の教育活動全体を通して育成すべき『資質・能力』を育むための授業改善と学習評価の充実」

各教科等における「資質・能力」について

- (1) 生活を主体的に営むために必要な知識及び理解、それらに係る技能【知識及び技能】
- (2) 家庭や地域及び社会における生活の中から問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、考察したことを根拠に基づいて論理的に表現するなど生涯を見通して生活の課題を解決する力【思考力、判断力、表現力等】
- (3) 様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、地域社会に参画しようとするとともに、自分や家庭、地域の生活を主体的に創造しようとする実践的な態度【学びに向かう力、人間性等】

高校部会テーマにおける現状と課題

【現状】

- (1) 成年年齢の引き下げに伴い、自立した消費者として適切な意思決定する力の育成が求められているが、自らの消費行動や生活の課題を身近なものとして捉えられていないため、家庭や社会の課題を見だし、改善に向けて実践する力が十分でない。
- (2) 生徒が自らの生活を振り返る経験が乏しいため、学びの過程等を客観的に捉える機会が少なく、自己の行動を調整して、主体的に生活を改善しようとする実践的な態度が身に付いていない。

【課題】

- (1) 生活の課題を身近なものとして捉えるための視点を学習に継続的に取り入れる必要がある。
- (2) 自分や家庭、地域の生活の課題を見だし、改善しようとする態度を身に付けさせるため、実践的・体験的活動や協働学習を継続的に取り入れる必要がある。
- (3) 自らの生活を振り返り、行動を調整する態度を養うため、自己評価や相互評価を工夫する必要がある。

【テーマ設定のための着眼点】

- ・生活の課題を主体的に捉えて身近なものとし、課題を改善する能力を身に付けさせるためには、消費者としての視点を取り入れた協働学習や自己評価と相互評価を充実させる。

高等学校家庭部会主題

消費者としての視点から生活の課題を見だし、改善することのできる資質・能力を育むための授業改善と学習評価の充実

仮 説

- (1) 消費者の視点を継続的に学習へ取り入れることによって、日常生活における課題を身近なものとして捉えられるようになり、主体的に課題を見だし、改善を目指そうとする態度を身に付けることができる。
- (2) 生徒の自己評価及び相互評価活動を通して、自己を調整する態度を養い、生涯を見通して生活を改善する力を身に付けることができる。

具体的方策

- (1) 消費者の視点をういた実習や観察、調査、実験、演習等の実践的・体験的な学習の内容を工夫することによって、身近な生活の課題について主体的に考えることができる。
- (2) 生徒による自己評価及び相互評価、教師による評価を行い、消費者としての視点を取り入れた振り返りシートや実践計画を作成させる。

検証方法

- (1) 授業観察や事前・事後のアンケート、ワークシート、検証授業等から、消費者としての視点を用いた学習の効果を検証する。
- (2) ワークシートへの取組や事前・事後のアンケート結果、振り返りシートや実践計画から、生徒による自己評価及び相互評価の効果を検証する。

V 研究内容

実践事例 1

教科名	家庭	科目名	家庭基礎	学年	第1学年
-----	----	-----	------	----	------

- (1) 単元名、使用教材（教科書、副教材）
- ア 単元名：第1編 第1章 自分らしい生き方と家族
 - イ 使用教材：教科書「新図説家庭基礎」実教出版
- (2) 学校の目標
- ア 知識及び技能
 - 確かな学力を身に付け、自ら将来設計し、社会での役割を模索できる力
 - イ 思考力、判断力、表現力等
 - 問題・課題を自ら見つけ、実行し、振り返りを行うことによって自己を高める力
 - ウ 学びに向かう力、人間性等
 - 多様性を共有・理解し、グローバル社会で共に生きる力
- (3) 教科・科目の目標
- ア 知識及び技能
 - 生活を主体的に営むために必要な理解、それらに係る技能
 - イ 思考力、判断力、表現力等
 - 家庭や地域及び社会における生活の中から問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、考察したことを根拠に基づいて論理的に表現するなど生涯を見通して生活の課題を解決する力
 - ウ 学びに向かう力、人間性等
 - 様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、地域社会に参画しようとするとともに、自分や家庭、地域の生活を主体的に創造しようとする実践的な態度
- (4) 単元の目標
- ア 知識及び技能
 - 人の一生について生涯発達の視点で捉え、自己と他者、社会との関わりから様々な生き方があることを理解する。青年期の課題である自立について理解するとともに、自立した生活を営むために必要な情報の収集・整理を行い、生涯を見通した生活を設計する技能を身に付ける。
 - イ 思考力、判断力、表現力等
 - 男女が協力して家族の一員としての役割を果たし家庭を築くことの意義や重要性について考察し、様々な生活課題に対応した自己の適切な意思決定に基づき責任をもって行動するなどして、課題を解決する力を身に付ける。
 - ウ 学びに向かう力、人間性等
 - 自らの生き方を見つめ、将来の生活に向かって目標を立て、展望をもって生活を創造し、実践しようとする。

(5) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
人の一生について生涯発達の視点で捉え、自己と他者、社会との関わりから様々な生き方があることを理解している。 青年期の課題である自立について理解しているとともに自立した生活を営むために必要な情報の収集・整理を行い生涯を見通した生活を設計する技能を身に付けている。	男女が協力して家族の一員としての役割を果たし家庭を築くことの意義や重要性について考察し、様々な生活課題に対応した自己の適切な意思決定に基づき、責任をもって行動するなどして、課題を解決する力を身に付けている。	自らの生き方を見つめ、将来の生活に向かって目標を立て、展望をもって生活を創造し、実践しようとしている。自立した消費者として、生活情報を活用し、社会の一員として行動しようとしている。

(6) 単元の指導と評価の計画（8時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		ア	イ	ウ	
第1時	・今の自分をみつめる ・人生80年を見通す	●		●	・自分について説明することができるか。(ワークシート) ・各ライフステージの発達課題について理解しているか(小テスト)
第2時	・青年期の生き方について考える		●		・青年期の発達課題である自立について、自覚できたか。(ワークシート)
第3時	・家族って何だろう		●		・家族、家庭の意義や機能について考えることができたか。(ワークシート)
第4時	・家族に関する法律の理念と背景 ・家族に関わる法律	●			・家族の法律の理念、民法改正の動き、夫婦・親子・扶養・相続に関する民法について理解できたか。(小テスト)
第5時	・現代の家族を取り巻くことがら			●	・家族に関するデータから変化を読み取り、それに伴う家族に関する課題について、改善策を考えることができたか。(ワークシート)
第6時	・労働について考える ・共に働くことを考える	●	●		・多様化する就業形態について理解できたか。(小テスト) ・家庭と仕事を男女で共に担う大切さについて考えることができたか。(ワークシート)
第7時	・生活時間から見えてくるもの		●		・男女共同参画社会の実現を目指す社会的背景について考えることができたか。(ワークシート)
第8時(本時)	・生活的自立と生活時間		●	●	・時間と費用、栄養面を考えながら、自分の食生活を創造し、実践しようとしているか。 ・班での話し合い活動を通して、他者の意見を聞き自分の考えを深め、課題を解決する力を身に付けているか。(ワークシート)
<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 第8時は、本単元「自分らしい生き方と家族」のまとめであるとともに、次単元「食生活をつくる」の導入とする。 </div>					

(7) 本時（全8時間中の8時間目）

ア 本時の目標

(ア) 時間と費用、栄養面を考えながら、自らの食生活を創造し、実践しようとする。

(イ) 班での話し合い活動を通して、他者の意見を聞き自分の考えを深め、課題を解決する力を身に付ける。

イ 仮説に基づく本時のねらい

(ア) 内食・中食・外食を選択した際にかかる費用の差や所要時間を比較した上で、自分や

家族の消費行動を考えさせる学習を取り入れることで、学習内容と実生活の消費行動が結び付き、主体的に課題を見だし、解決を目指そうとする態度を身に付けることができる。

- (イ) 提案する改善策について、他者の提案と比較し、自己評価と他者評価を行い、自由記述で互いの良い点や改善策を具体的に表現することで、自己を調整する力が身に付く。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 15分	<ul style="list-style-type: none"> ○限られた時間の中で、しなければならないこと、したいことは何か、考える。 ○食事に関する時間について学習することを教える。 ○ワークシート右側「まとめ」の欄の「本日の学習の課題」を記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の裁量で何をするか決められる時間は、数時間しかないことに気付かせる。 ・「本日の学習の課題」は、「平日に、ごはん・ハンバーグ・サラダ・スープの夕食をとるにはどうすればよいか」ということを伝える。 	
展開 ① 15分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">内食、中食、外食の費用と所要時間の違いについて</div> <ul style="list-style-type: none"> ○同じ献立を手作りした場合、買って帰った場合、お店で食べた場合の費用と所要時間を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内食・中食・外食の費用と所要時間の表をスクリーンに映す。 	
展開 ② 15分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">内食・中食・外食のメリット・デメリット</div> <ul style="list-style-type: none"> ○生活時間の表を見直し、ごはん・ハンバーグ・サラダ・スープの夕食を摂るには、内食・中食・外食のうちどれを選択するか考え、ワークシートに記入する。 ○4人班の座席に変更。互いの策を発表し、班としての方策を決める。 ○中食・外食の費用には、食材料費のほかに何が含まれているのか考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・普段食べている食事は、誰が考えて誰が買い物して誰が調理して誰が片付けているのか、そして、それにどれだけの時間がかかっているのか、自立するためには、今後どうすべきか、考えさせる。 ・適宜発問する。 ・家事の外部化に触れながら説明する。 	ウ (ワークシート) イ (ワークシート)
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> ○ワークシートに、1週間の中で、内食、中食、外食をどう配分するか、その理由を記入する。 ○ワークシート提出 	<ul style="list-style-type: none"> ・何人かに記入した内容を聞く。 ・今学期は、食事を組み立てる際に考えるべきことを学ぶことを知らせる。 	ウ (ワークシート)

(8) 本時の振り返り

ア 消費者の視点

夕食の献立を考えるに当たり、前時で生活時間について学び、内食・中食・外食の費用と所要時間、栄養価や食品添加物等の安全性等を総合的に比較させることで、自分や家族の消費行動を振り返り、限られた資源（お金・時間）で何を優先するか、主体的に考えることができた。また、班での話し合い活動や発表を通して自分の考えを深め、実生活に生かすことのできる具体的な解決策を導き出し、他者と共有することができた。

イ 学習評価

ワークシートに学習の課題や解決策の提案、班員の提案する解決策、話し合い活動を踏まえた解決策の欄を設け、自らの考えをまとめることができるよう工夫した。その結果、一週間の内食・中食・外食を計画し、生活を改善する方法を考えさせることができた。ワークシートへの記入で、生徒が自ら学習の目標を設定し、思考・判断・表現しようとしている意思的な側面を捉えることができた。しかし、評価表のねらいについて明確に示すことができず、評価に十分な時間を確保できなかったために、記述式の評価欄の記述が少なく、教師による評価を生徒の自己評価まで発展させることができなかった。

実践事例 2

教科名	家庭	科目名	フードデザイン	学年	第3学年
-----	----	-----	---------	----	------

(1) 単元名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名：健康と食生活

イ 使用教材：フードデザイン・cooking&arrangement

(2) 学校の目標

ア 知識及び技能

○知識・技術習得のインプット型から、探究等の演習中心のアウトプット型の授業を充実する。

イ 思考力、判断力、表現力等

○生徒の主体的、対話的で深い学びの実現を図る。

ウ 学びに向かう力、人間性等

○生徒による授業評価をさらに活用していく。

(3) 教科・科目の目標

ア 知識及び技能

○食生活の現状から食生活に関する課題を発見し、実践できる技術を身に付ける。

イ 思考力、判断力、表現力等

○食生活の充実向上を目指し自ら学び、主体的に食生活の創造と食育の推進に取り組む。

ウ 学びに向かう力、人間性等

○自ら学び、学んだことを家庭や地域社会に広めることができる。

(4) 単元の目標

ア 知識及び技能

○食生活の現状から食生活に関する課題を発見し、食生活の充実、向上を目指し、合理的かつ創造的に解決することができる。

イ 思考力、判断力、表現力等

○家庭や学校及び地域における食育の推進について課題を発見し、その解決に向けて考察し、家庭や社会の人々の健康増進と健全な食生活の実現を図るために具体的に考察することができる。

ウ 学びに向かう力、人間性等

○食生活の充実向上を目指して自ら学び、食生活の総合的なデザインと食育の推進に主体的かつ協働的に取り組む態度を養う。

(5) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
食生活の現状から食生活に関する課題を発見し、食生活の充実向上を目指し、合理的かつ創造的に解決する技術を身に付けている。	健康な食生活の在り方に関する課題を発見し、その解決に向けて望ましい食習慣の形成について工夫する力を身に付けている。	食生活の充実向上を目指して自ら学び、食生活の総合的なデザインと食育の推進に主体的かつ協働的に取り組もうとしている。

(6) 単元の指導と評価の計画（7時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		ア	イ	ウ	
第1時	・調査テーマの決定 ・アンケートの作成		●		・調査テーマについて、主体的に話し合い、決定することができる。
第2時	・アンケートのデータ集計	●			・アンケートの結果を適切に集計し、グラフ化できる。
第3時(本時)	・理想的な食習慣と朝ごはん	●	●		・自らの食生活や栄養摂取の状況を理解する。 ・消費者としての視点をを用いた協働学習を通して、課題を見だし、改善策を考えることができる。(ワークシート)
第4時	・朝ごはんの提案		●	●	・経済的・栄養的な視点から、よい朝ごはんの提案ができる。(ワークシート)
第5時	・早寝、早起き、朝ごはん (例)短時間で栄養価が高い朝食の整え方(文化祭で発表)		●		・学習した内容を分かりやすく伝えることができたか。(来場者アンケート)
第6時	・早寝、早起き、朝ごはん (例)短時間で栄養価の高い朝食の整え方(食育フェア2020への参加)		●		・学習した内容を分かりやすく伝えることができたか。(来場者アンケート)
第7時	・事後アンケート、集計	●		●	・自らの食生活を改善できたか。(アンケート)

(7) 本時（全7時間中の3時間目）

ア 本時の目標

- (ア) 自らの食生活や栄養摂取の状況を理解し、食生活に関する課題を発見した上で、食生活の充実向上を目指し、解決策を考察することができる。
- (イ) 各教科や消費者としての視点をを用いた協働学習で学んだことをまとめ、発表できる。

イ 仮説に基づく本時のねらい

- (ア) アンケートや発表から、自分や他者が朝食を整える際にどのような消費行動を選択しているかを理解し、協働学習を通して理想的な食習慣を身に付けるための消費計画を考え、課題を見だし、改善しようとする実践的な力を身に付けることができる。
- (イ) 自らが提案する朝食を他者の提案と比較し、ルーブリック評価によって客観的に評価できる点に加え、自由記述で具体的な改善策を提案することで、自らの意思決定を大切にしながら他者の意見を取り入れ、自己の行動を調整する力が身に付く。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入5分	・挨拶、出欠を確認する。 ・本時の学習内容を理解する。 ・食生活のアンケートから自らの食生活の問題点を考える。	・以前行ったアンケートの結果を提示する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">食生活（食習慣）を振り返ろう</div> ・国民健康・栄養調査やアンケートの結果から自分の食生活の現状を知り、課題を気付かせる。	ア. 生徒が自身の食生活に関心をもつ。 (観察・発問)

展 開 40 分	1 知識構成型ジグソー法の学習方法を確認する。 エキスパート活動とジグソー活動について説明する。	・手順について、ICTを用い視覚的に捉えさせる。	
	2 エキスパート活動を実施する。 四つのエキスパートグループに分かれ、資料を読み取る。 A 生活習慣の乱れから引き起こること (保健体育) B エンゲル係数について (商業・ビジネス経済) C PFC比率から捉えた栄養比較について (家庭) D 食品群別摂取量から捉えた栄養比較について (家庭)	・他教科の視点を取り入れた資料を使用する。 ・資料の内容は既習事項とし、教科書や資料集より抜粋する。 ・話し合いをさせながら設問に取り組みせ、理解を促す。 ・報告メモは、同一内容になるようにする。 ・各グループの報告メモを机上の台紙に貼る。	ア 正しい食習慣や食の外部化によるエンゲル係数の増加などの諸問題、PFCの適正比率、食料自給率、食品分別摂取量等について正しい知識を身に付ける。(報告メモ)
	3 設問について、協働して答えを導き出す。 エキスパート活動で学んだことをまとめ、報告メモを書いて発表する。	・エキスパート活動で得た知識や技術を、報告メモ活用しながら順番に報告する。気になる点、分からない点があれば報告者に質問する。	イ 各教科や消費者としての視点をういた協働学習で学んだことをまとめ、発表できる。(観察と報告メモ)
	4 ジグソー活動を実施する。 ジグソー活動グループにわかれエキスパート活動の内容について互いが報告し、教え合う。	・理想的な食習慣と朝ごはんのポイントを考え、付箋に書いて台紙に貼っていく。 ・グループで意見をまとめる。	イ 各教科や消費者としての視点をういた協働学習で学んだことをまとめ、発表できる。(観察と報告メモ)
	5 クロストーク活動を実施する。 分かったことをまとめて、理想的な食習慣と朝ごはんのポイントを考える。 報告メモを書き、発表する。		
ま と め 5 分	・本時の授業を振り返る。	・本時の学習内容を振り返る。次の時間によりよい朝ごはんを考え、文化祭や食育フェアで発表することを伝える。	イ 学習のまとめとして、実践的な取組を考案することができる。(発問・観察)

(8) 本時の振り返り

ア 消費者の視点

本時は、様々な視点から食生活の現状と課題について理解し、自らの消費行動が食生活や社会に与える影響について考え、消費者として主体的、総合的な視点で食生活を工夫できることをねらいとした。そのために、事前にアンケート調査を行い自分の食生活について考えさせた。また、他教科や消費者の視点を取り入れた協働学習を行い、食生活を多面的・総合的に捉え、視野を広げた。このことにより、自分の食生活に置き換え、食品選択に着眼した実践可能な手段を見付けることを通して、主体的な消費行動につながられるよう考えを深めた。学習した内容を活かして理想的な朝ごはんを考案し、文化祭や地域で発表することで、家庭での実践や社会への参画を促した。

イ 学習評価

自己評価・相互評価を行うことで、自身の良い点や可能性について気付くことによって自己肯定感を高められるように工夫した。さらに、主体的に学ぶ意欲を高め、学習の在り方を改善していくことで自己の行動を調整する能力を養えるようにした。

実践事例 3

教科名	家庭	科目名	食品衛生	学年	第3学年
-----	----	-----	------	----	------

- (1) 単元名、使用教材（教科書、副教材）
- ア 単元名：器具・容器包装の概要
 - イ 使用教材：食品の安全と衛生
- (2) 学校の目標
- ア 知識及び技術
 - 高い技術・技能を身に付けさせ、将来のスペシャリストとしての資質能力を育てる。
 - イ 思考力、判断力、表現力等
 - 自発的に学習に取り組み、豊かな知性や感性、創造力を伸ばす。
 - ウ 学びに向かう力、人間性等
 - 自ら進んで社会に貢献しようとする意欲や行動力にあふれる生徒を育てる。
- (3) 教科・科目の目標
- ア 知識及び技術
 - 食生活の安全と食品衛生対策について体系的・系統的に理解するとともに、関連する技術を身に付けるようにする。
 - イ 思考力、判断力、表現力等
 - 食生活の現状から食品衛生に関する課題を発見し、安全で衛生的な食生活の実現を担う職業人として合理的かつ創造的に解決する力を養う。
 - ウ 学びに向かう力、人間性等
 - 安全で衛生的な食生活の実現を目指して自ら学び、食品衛生に主体的かつ協働的に取り組む態度を養う。
- (4) 単元の目標
- ア 知識及び技術
 - 重金属、化学物質、マイクロプラスチックなどの有害物質が環境を汚し、食品や人体に影響を及ぼしていることが理解できる。生活と環境との関わりや持続可能な消費について理解するとともに、持続可能な社会を目指したライフスタイルと将来を見通した生活を設計する技術を身に付けるようにする。
 - イ 思考力、判断力、表現力等
 - 安全で安心な生活と消費について多面的・多角的に考察するとともに、生産と消費の在り方を含めライフスタイルの工夫について具体的に考察し、解決する力を養う。
 - ウ 学びに向かう力、人間性等
 - 持続可能な社会の構築には一人一人の参画が必要であることを学び、主体的かつ協働的に学習に取り組む態度を養う。

(5) 単元の評価規準

ア 知識・技術	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
重金属、化学物質、マイクロプラスチックなどの有害物質が環境を汚し、食品や人体に影響を及ぼしていることが理解している。 生活と環境との関わりや持続可能な消費について理解するとともに、持続可能な社会を目指したライフスタイルと将来を見通した生活を設計する技術を身に付けている。	安全で安心な生活と消費について多面的・多角的に考察するとともに、生産と消費の在り方を含めたライフスタイルの工夫について実践する力を身に付けている。	持続可能な社会の構築には一人一人の参画が必要であることを学び、主体的かつ協働的に学習に取り組む態度を身に付けている。

(6) 単元の指導と評価の計画（7時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		ア	イ	ウ	
第1時	・器具・容器包装の種類と特徴を理解しよう ・漂着ごみを調査しよう ※宿題：1週間のプラスチック製品の使用量を調査しよう！	●			・器具・容器包装の種類と特徴が理解できる。(ワークシート) ・漂着ごみにプラスチックが多いことが理解できる。(ワークシート)
第2時	・プラスチック汚染について調べよう①	●	●		・与えられたテーマについて調べ、まとめることができる。(ワークシート)
第3時	・プラスチック汚染について調べよう②	●	●		・与えられたテーマについて調べ、まとめることができる。(ワークシート)
第4時 (本時)	・プラスチック汚染について考えよう。 ・持続可能な社会に向けて自分ができようことを考えよう ※宿題：プラスチック製品を(なるべく)使わない1週間を目指そう！		●	●	・持続可能な社会の実現に向けた解決策を考え実践することができる。(ワークシート) ・学んだことをまとめ、発表することができる。(発表)
第5時	・プラスチック汚染防止に向けて世界や日本での取組と課題を理解しよう。	●			・プラスチック汚染防止に向けて世界や日本での取組と課題を理解することができる。
第6時	・ポスターを作成しよう① プラスチック汚染を防ぐために		●		・学習した内容を分かりやすく表現して、他者に伝えることができる。(作品)
第7時	・ポスターを作成しよう② プラスチック汚染を防ぐために		●		・学習した内容を分かりやすく表現して、他者に伝えることができる。(作品・発表)

(7) 本時（全7時間中の4時間目）

ア 本時の目標

- (ア) プラスチック汚染について理解できる。
 (イ) 持続可能な社会に向けて自らができることを考えることができる。

イ 仮説に基づく本時のねらい

- (ア) 普段のプラスチック製品を使用量を調査させ、自らの消費行動を振り返る機会を与えることにより、授業と日頃の消費行動が結び付き、主体的に課題を見つけることができ、改善しようとする実践的な態度を身に付けることができる。
 (イ) 自らの消費行動を評価し、持続可能な社会に向けた取組について、ルーブリック評価を行うことにより、適切な自己評価・他者評価ができるようになり、実際に自身の立てた目標を1週間実践することにより、自己の行動を調整する力が身に付く。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶をする。 ・出欠を確認する。 ・本時の学習内容を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習内容を説明する。 	
展開 ① 20分	プラスチック汚染について理解しよう		
	<ul style="list-style-type: none"> ・3～4人の班を作り、調べてきたことを共有する。 A (プラスチック製品と特徴) B (プラスチック汚染) C (マイクロプラスチック) D (規制の取組) ・グループの代表者1名が、2～3分程度で話し合い内容を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループの話し合いが適切に行われているか、机間指導等によりチェックし、必要に応じ支援する。 	イ 自らの考えをまとめ、他者との協働学習により考えを修正したり深化したりすることができる。(観察・ワークシート)
展開 ② 20分	持続可能な社会に向けて、自分ができることを考えよう		
	<ul style="list-style-type: none"> ・SDGsについての説明を聞く。 ・持続可能な社会に向けて「明日の自分にできること」、「1年後の自分にできること」、「10年後の自分にできること」を考える。 ・発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・SDGsについて説明する。 ・現在消費者としてすぐにできることは何か、将来生産者の立場となった時にできることは何か考えさせる。 ・発表させる。 	ウ 持続可能な社会に向けてできることを主体的に考えようとしている。(観察・ワークシート)
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習から、学習内容を振り返り、自己評価・他者評価を行う。 ・宿題を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りシートを用いて、本時の学習内容を振り返らせる。 ・宿題「プラスチック製品をなるべく使わない一週間を目指そう」について説明する。 	イ 適切な自己評価、他者評価を行える。(ワークシート)

(8) 本時の振り返り

ア 消費者の視点

本時は、持続可能な社会に向け、消費者として何ができるかについて考えた。

明日からできることとして、「エコバッグを持参し、買い物時にビニール袋をもらわない」「ペットボトルではなく水筒を持ち歩く」など、具体的に生徒たちに考えさせることができた。また、1年後、10年度にできることとして、「物を長く使う」「ごみを分別する」など将来のライフスタイルに合わせて、どのような工夫ができるか考えさせることができた。

授業後、プラスチックをなるべく使わない1週間を過ごすことを宿題とした。実際に行動に移すことにより、一人一人の生活改善へとつながった。安易に個人利益や利便性だけを追い求めるのではなく、環境や社会への影響を意識した責任ある消費について考えさせることができた。

イ 学習評価

授業の開始時に学習到達目標を示し、生徒が目標をもち主体的に授業に取り組めるようにした。自己・他者評価する能力を養うために、授業の終了時にルーブリック評価を実施した。生徒自身が学習の理解度を把握し、次回への課題を明確にさせることができた。

VI 研究の成果

1 消費者の視点から課題を見いだす

3回の検証授業では、領域を横断（単元間連携）し、食物領域に消費者の視点を取り入れた。栄養面等の食領域の学習の視点に加え、消費者の視点を取り入れることにより、授業において自らの生活経験と学習内容が結び付けて考え、主体的に学習に取り組む態度や、生活の課題を見いだし改善しようとする態度が身に付くなどの生徒の変容が見られた。

研究員が所属している学校で、単元の学習前後に「生活習慣」「食習慣」「食の選択と環境」についてのアンケートを行った。「食習慣」についての事前アンケートでは、普段朝食を欠食している生徒が約25%いる学校があることが分かった。また、事前アンケートから、栄養の重要性については理解し、生徒の約65%が食事を摂る際の一つの基準として考えている一方、時間やコストの面を考えて食生活を送っている生徒は10%に満たないことが分かった。今回の検証授業で、時間やコスト、栄養バランス等を総合的に捉えて食生活について考えさせた結果、事後アンケートや振り返りシートの自由記述には、栄養だけでなく、時間やコストについても考慮した食事計画を立てることが大切だという記述が見られた。また、宿題として実際に朝食を作った結果、自分や家族の価値観や生活に合った朝食を整えることができ、事後のアンケート結果からも、自ら食事を整える工夫を実践する生徒の割合が約8%から25%に上昇し、生活の改善がみられた。

「食と環境」については、コンビニエンスストアやスーパーマーケットで袋をいつも受け取っている生徒が約40%いることが分かった。授業でプラスチック汚染について調べ、消費者として明日からできることを具体的に考えさせる工夫を行ったことで、「環境にも経済的にもよいエコバックを日頃から持参したい」という記述が振り返りシートに多く見られ、一人一人が持続可能な社会に向けて、環境に配慮した消費をしていかななくてはならないということに気付き、視野を広げることができた。授業後、プラスチック製品をなるべく使わない一週間で過ごす取組を行った結果、使い捨てのプラスチック製品の使用が大きく減少した。取組を行った全ての生徒の使い捨てプラスチックの使用量が減少し、中には以前と比較して10分の1の使用量まで削減できた生徒もいた。加えて、学習の成果を文化祭や地域の食育フェアで発表したり、作成したポスターを校内や地域で掲示したりするなど、地域や社会にも取組を発信した。消費者の視点を授業に取り入れたことで、生徒が自分事として主体的に学習に取り組み、自らの課題を見つめ、改善できたと考える。

2 自己評価と相互評価

授業の開始時に学習の目標及びルーブリック評価表を提示し、目標を明確に示すことによって、生徒が自己の現状について把握することができた。その結果、教師はルーブリックの評価規準に照らし、生徒の学習の状況について、質的な高まりや深まりの観点から評価することができた。さらに、ルーブリック評価表の目標に沿って、生徒が自分や家庭、地域の生活の課題を消費者の視点から見いだし、改善策の作成や振り返りを行った。自己評価や相互評価を行うことで、生徒は自らの学習の在り方や観点を見直すことができた。評価表の自由記述欄に、良い点と改善すべき点について丁寧に書かせたことで、他者の評

価や助言を熱心に読み返し、自身の生活の改善に生かしたいという感想や発言が多く見られた。この取組によって、自分も他人も消費者であることを自覚し、実際に学習した成果を自身の生活に生かすとともに、より主体的かつ粘り強く学習に取り組むようになった。

また、単元のまとめとして、自らの考えを発表し、発表についてグループで話し合い、考えを共有する取組を行った結果、自らの考えを相対化することができた。相互評価の結果を生かし具体的な改善案を提案して発信するポスター作成や文化祭・地域のフェアにおける発表は、保護者や地域から好評を得た。このような評価活動を通して、生徒は家庭や地域の中で、消費者としての自覚をもって、より実生活に合った行動をすることができるようになった。さらに、自ら朝食や昼食の弁当を準備する生徒や、環境に配慮した消費を考え実践する生徒が増え、生活を主体的に創造しようとする、生徒の変容が多く見られるようになった。これらの評価の取組を通して、生徒が自らの行動を調整しようとする力が高まったと考える。教師は、指導のねらいに応じて、生徒自身のPDCAサイクルによる学習を支援することが重要であり、そのサイクルの要となる「評価」については、生徒が自ら評価する自己評価に加え、相互評価を実施することによって大きな教育効果が期待できることが分かった。

VII 今後の課題

「消費者の視点から生活の課題を見いだす資質・能力を育むための授業改善」については、研究の成果で述べたように、生徒が主体的に生活の課題を見いだすために、今回取り組んだ単元以外においても消費者の視点を取り入れることが有効であるか、検証する必要がある。

本研究では、食物領域を中心として消費者の視点を取り入れ、教材の開発を進めた。消費行動は、家族・保育・福祉や衣食住全てに関わるものであるため、その他の領域や単元においても消費者の視点を取り入れた教材の開発を進めることで、授業改善を図ることができる。今後、他の領域における消費者としての視点を取り入れた授業が有効であるか検証するためには、年間授業計画において長期的に計画し、実践していく必要がある。

「生活を改善することのできる資質・能力を育むための学習評価の充実」について、本研究で作成した振り返りシートや改善計画は、「知識・技能（技術）」の評価だけでなく、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の評価にも活用できることが分かった。

また、自己評価や相互評価等を取り入れ、学習評価の規準を明確に生徒に伝えることは、生徒が課題意識をもって学習に取り組み、生徒の学習意欲を向上させることにつながった。さらに、消費者としての視点を常に意識した授業を実践することによって、自立した消費者としての資質・能力を育成することができると考える。自立した消費者を育成するためには、領域横断的（単元間連携）な教材開発と授業実践を積み重ね、評価計画についても検証していく必要がある。今後、様々な領域や単元でルーブリック評価表を活用し、教員の見取りと生徒の自己評価と他者評価の結果や生徒の変容を基に、より汎用性の高いものに改善することで、教師の経験年数等に左右されず、生徒の学習状況を的確に評価し、生徒の資質や能力を確実に把握でき、どの単元でも活用できる評価方法を構築することが期待される。

平成 31 年度 (2019 年度) 教育研究員名簿

高等学校・家庭

学 校 名	職 名	氏 名
東 京 都 立 忍 岡 高 等 学 校	教 諭	宮 島 陽 子
東 京 都 立 桜 町 高 等 学 校	主任教諭	◎佃 康 子
東 京 都 立 赤 羽 商 業 高 等 学 校	教 諭	渋 谷 紘 未
東 京 都 立 農 業 高 等 学 校	教 諭	谷 野 晴 樹

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課

課長代理 浦島 真由美

平成 31 年度 (2019 年度)
教育研究員研究報告書
高等学校・家庭

令和 2 年 3 月

編 集 東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6849